

しかし純度九〇％では敵機と太刀打ちできぬ、飛び立つと同時に撃墜されることは目に見えていました。いよいよ航空隊も万事休すでした。

昭和二十年五月八日、ドイツ無条件降伏の報が入電しました。この時点で日本も連合軍に降伏していたら、何十、何百万の人達が生命を全うできたと思うと、残念でした。

終戦となって戦後処理のために、岐阜県加納町の司令部の例の二重金庫の中にあつた極秘文書を焼却するために、払暁から日没後まで、八月の炎天下で瀧のごとき汗を流しながら作業しました。結局自宅に帰つたのは九月の末でした。友達が前は「糞真面目だ」と笑っていました。

部落で七人戦死者がいました。小学校の同窓生が十七人戦死しています。自分は戦地へ出陣せずに内地のみでしたが精神的苦労は山ほどありました。実際に砲煙弾雨の中を走った経験は無かったです。精神的苦労は充分しました。二カ年九

カ月の軍隊生活が戦後の活力となつて、たとえ僅かでも世の爲、人の為に働く事を誓い今日まで生きて来ました。余生も少しだと思いますが、何とぞ平和な日本、そして戦争の無い世界を祈念致します。有難う御座いました。

一年生のひよこ鷲

長野県 服部 幸雄

私は大正十四（一九二五）年三月一日、長野県伊那市大字伊那（本籍と現住所と同じ）に生まれました。

私が軍隊へ入つたのは、昭和十九（一九四四）年八月十五日で、在隊期間ちょうど一カ年。飛行機のパイロットとして未だ荒鷲、若鷲どころか、羽も生え揃わぬ「ひよこ鷲」で終戦となった、実戦の体験も皆無でした。もっとも地上にいて敵機の攻撃から逃げ廻って待避したのは始終のことです。

したが、そんな半人前にも至らぬ「ひよこ」で終戦となり復員しました。労苦調査の語り部として、聞き取りを受けるとは、恥ずかしい思いです。

以下私の経歴を簡単に述べます。

- 一 昭和十九年八月十五日 特別幹部候補生として中部第九十七部隊へ入営。静岡県引佐郡三方ヶ原第七航空教育隊。
- 一 昭和十九年十二月二十八日 各務原航空廠転属（名古屋空襲があった）
- 一 昭和二十年三月一日 上等兵に進級
- 一 昭和二十年三月二十五日 第一八四独立整備隊編入。燕一九〇六九部隊越谷駐屯
- 一 昭和二十年四月十二日 第一航空軍第十飛行師団東京防衛戦隊へ部隊が移動、保土ヶ谷トンネルで空襲待避。この間約一カ月半、肺炎のため、横浜市内の横須賀陸軍病院分院へ入院

一 昭和二十年五月三十日 埼玉県越ヶ谷飛行場第七十戦隊と合流予定

一 昭和二十年六月 千葉県柏飛行場に移動。第二十四夜間戦闘隊付き

一 昭和二十年八月一日 兵長に進級。グラマン

機銃掃射、東京空襲

一 昭和二十年八月六日 広島へ原子爆弾投下

一 昭和二十年八月九日 長崎へ原子爆弾投下

一 昭和二十年八月十五日 終戦

一 昭和二十年八月十八日 復員帰郷

以上が私の軍歴の大略です。

次に私が入営した昭和十九年八月十五日頃の、私の家庭の状況を申します。

父 死亡 私が十一歳の時に死去

母 健在 酒の小売店、品物なくて営業

不能 家庭貧困

長男 死亡 幼児期に死去

次男 死亡 幼児期に死去

三男 死亡 幼児期に死去

四男（私） 横浜の日立戸塚工場勤務、

モーター類の製造に従事

五男 健在 小学生

六男 健在 小学生

長女 健在 小学生

次女 健在 小学生

という六人家族で、その内働いて収入の有るのは私一人。その私が軍隊に入って、日立工場の収入が無くなる事は、家庭の死活に影響する事態でした。母がどんなに処置したのか不明です。とにかく後髪を引かれ放しの辛い気持ちで家族をすてて出たことでした。

さて、私の学歴は高等小学校卒業です。日立の戸塚工場へ就職勤務し、昼は仕事、夜は勉強で、当時の「専門学校入学資格検定試験」にパスしておりました。特別幹部候補生採用の資格は、当時の中等学校卒業程度でした。私は前述の検定試

験をパスしたので、資格はOKでした。

入学時の私の年令は満十九歳。一般の入学者よりは一〜三歳年長でした。昭和十九年八月十五日の入学者人数は、一個中隊当たり五〇〇人。八個中隊ありました。全体で約四千人です。私は入営前、日立の戸塚工場で既に勤務労働の実績があり、機械、器具、工具、備品等についても、名称とか使用法について予備知識もあり、いろいろな名前を軍隊用語に直すことについても、衆に抜きん出て正確に早く楽にできました。身分は新兵でありながら、責任は分隊長のようになり、部下十五人を預かりました。

二〇ミリの重爆の尾部の機関砲の取り扱い発射等の訓練がありました。一度弾丸が詰まって抜けなくなり、大変難儀なことになりました。とにかく、一般に言って、幹部候補生となれば一般の兵隊の三〜四倍しごかれ、たたき込まれ、促成栽培の苦しさがつきものでしょう。

それが上に特別が冠せられると、もう必死、決

死の残酷さも加わり、その労苦は筆舌につくせぬこと。苦闘、死闘により教育訓練をやりとげた者に特別幹部候補生の栄冠が輝く。世の中はそうそう甘くはないのである。それだけに進級も早かった。

八月十五日入営。翌年の三月一日上等兵。八月一日兵長進級。終戦がもう半年遅ければ伍長に任官したかもしれません。飛行機の整備と、重爆機の乗組員（機関砲の射手）を兼ねた航空兵のためか、他の兵科よりも食事の質が良く、胃の虫が喜んでいました。

身分の上下については、八月十五日入営の同年兵の戦友と同列であり、対抗ビンタも公平に見舞われました。しかし教育に移ると、私は一段上の分隊長に代わり、楽をさせて貰いました。

部隊での教育は大体において「少年兵」扱いでした。年令的にそうなります。学科の授業が多く

て、教練の術科は「皆中学校で修得済であり、航空兵のため地上の兵科と違い余り必要でない」との理由か、教練は週一回位でした。

大体私の主たる任務は東京防衛戦隊付きで、埼玉県越ヶ谷、千葉県柏等の飛行場で夜間戦闘隊の出撃準備ですが、何しろ経験が浅いので重要でない初歩的な仕事をしていました。

ところで、一番いやなこと、苦しんだことは三方ヶ原より各務原へ移るとき、直前の四カ月の教育では使いものにならないから、そこで全員に転属希望書を提出させられました。南方へ移りたい、支那へ、満州へと各自好きに書いたのです。私は内地転属を希望し、二次教育を受けたいと書きました。

整備の本職となると機体やプロペラの整備をする。エンジンの分解組立てには二年、三年かかる。一ぺんには覚えられない。とにかく奥行きが深い仕事です。また重爆機などの空中勤務は建前として下士官にならぬとダメ。私はたまたま訓練で

乗せて貰った位でした。

当時の軍隊では兵力、部隊の増設、新編成、損害の補充等々が盛んに行われ、そのために下士官、指揮官の促成、速成教育が大変重要でした。整備では飛行機の脚あげ、機関砲の発射ができればよい。伍長になれる！と言われたものです。そんな状況で私としては、熟練ではなくて、初歩的段階のまま、毎日を訓練に明け暮れていました。

今にして振り返って考えて見ますと、特別幹部候補生などというには縁遠く、昭和十九年八月十五日に入営して、昭和二十年八月十五日に終戦。ちょうど一カ年の軍隊生活。初年兵の段階でした。

飛行機も油も資材も食事もすべて不足のまま、規律や叱咤激励、軍人精神の昂揚等が優先する軍隊生活。その上最悪の条件として制空権を敵にとられ放しでした。話に聞くと戦地の最前線で

も、制空、制海の至高至強の生命線を敵にとられて、勝負にならぬ、苦戦をしいられていたと聞いていました。

それにしても、よく頑張った、よく戦ったと頭が下がります。この敢闘精神、不屈の負けじ魂が、戦後の復興再建、発展への原動推進力となつたと信じます。「玉磨かざれば光りなし」です。

最後に私の戦後編を

結婚は昭和二十八年三月八日です。夫婦共に健在で約半年前に金婚式をやりました。子供は男女女と一男二女、皆元氣。息子は家業の跡継ぎをやり、お陰で繁昌しています。娘は二人共結婚して他家へ縁つきました。孫は六人。内三人外三人。皆元氣ですくすく育って私も家内もまあまあ安心です。